

## In Between (間)

Elena Azzedin

現実がバーチャルの世界に溶け出す、そこは二つのパルスが鼓動する非物質の認識の世界。しかし現実にはモノがあふれ飽和状態、私たちが住む地球に混乱を招き、無数の生態系を破壊しています。最近の研究によると、地球上の人類が残したフットプリントは、他のすべての生物を合わせたフットプリントよりも大きいそうです。プラスチックの量だけでも、陸上動物と海洋生物を合わせた量を上回ります。ドネラ・メドウズは1972年に発表した地球のサステナビリティに関する研究 *The Limits to Growth* (成長の限界) の中ですでに、資源が限られている中で無制限の成長をベースにした経済・社会・道徳モデルに帰する「人類のジレンマ」について考えるべきだと唱えています。この50年間、環境問題を疎かにした政治によって現代はモノがあふれています。この時代を学者や思想家は、アントロポセン(人類新世)あるいはキャピタロセン(資本新世)と呼んで区分しています。しかしながら特権階級である人類は、これらの「隠された犠牲」に目をつぶっているのが実情です。ガブリエレ・ツィンメルマンは人類の役に立つ輝かしいモノ、大きなフットプリントを残すモノを私たちに突きつけることによって、「目に見えないもの」を再発見しようとしています。

2016年に福岡県糸島市の Studio Kura のために制作されたインスタレーション「In Between」でも、す

でにツインメルマンは自然・人工、伝統・現代、内・外の関係を探求しています。植物のシルエットを投影したインテリア空間の中で、シルエットが自然を演出しています。それだけではなく、つい最近まで衣服から建築物にいたるあらゆる生産が伝統と自然素材をベースにしていたことを思い出させてくれます。安価に仕入れた古着の着物がずらりと並んだ廊下、古い着物が価値を失ったことは、現代社会が伝統的な生活様式から遠ざかっていることを裏付けています。その反面、モノを買えば無料でもらえるレジ袋で覆いつくされたもうひとつの廊下、使い捨て文化がいかにかたり前になっているかを認識させられます。この二つの要素からできた新たな空間は、異なる二つの時代だけでなく、価値観の違いでも分けられます。多くの人々にとって意味を失った伝統から解放されようとして、生態系とのバランスがよく取れていた当時の生活を忘れてしまったのです。ツインメルマンは、そのどちらかの側に付くのではなく、日本の美意識の本質でもある「間」、つまり私たちを取り巻く全ての形はエンパイネスによってつくられるという概念に共鳴し、自らが希求する場所について思いを巡らすための空間を創造します。

2017年にブランカのAADKスペインレジデンスで行われた展覧会「Entre Medias (Stage One)」でガブリエレ・ツインメルマンは、使用済みのペットボトルを集めて空間を再定義し、そのボトルで揺れ動く雨の水滴を体現しました。岩が室内に流れ込んだ空間に、水のせせらぎとペットボトルがぶつかり合

う音に囲まれた異様で美しい風景が生まれます。この作品では実際に水を使わずに、規則正しいゲームのような手法で、主要テーマである水を再現しています。廃棄されたモノを通じて現代社会を見つめるツィンメルマンは、ペットボトルの中にパラドックスを見出します。水は 私たちにとって生活必需品、水がなければ生命が危険にさらされます。反面、私たちが大量に消費するペットボトル入りの水は地球を脅かしているのです。ツィンメルマンは、自然と芸術の間、必需と廃棄の間、遊び心と深遠さの間、美と恐怖の空間に私たちを連れ戻してくれます。

2020年、独シュツットガルトのオーバーウェルト・ギャラリーのために制作されたインスタレーション「Zwischen [PE.01]」では、数年かけて集めたプチプチつぶしを使った空間が創作されました。皮肉にも、この展示が終わった直後に始まった新型コロナのパンデミックで、ネット通販が盛んになり、プチプチ梱包材の需要が増えました。ここでもまた影が現れます。今回はアーティストが作り出した半透明の壁の向こう側を歩く人々によって演出されています。壊れやすいモノを守るためのこの梱包素材は、埋立地で朽ちることなく無残な姿をさらしながら「人類を守ることができない」とささやいています。

「Zwischen [PET.03]」は、これらの素材の最終点である完璧な円が、数分毎に何メートルもの層になって、刻々と地球の表面を覆っていく過程を再現します。来場者は生産や消費と同じように、おもしろが

りながら無邪気にこの円形の上を歩いています。終わりがないかのような今の輝きに気を取られ、プラスチックのきしみに潜む警告を読み解くことができないまま、人類は他に術がないかのように生活し、生産を続けています。

フェミニストで多種共生を唱えるのダナ・J・ハラウェイは、アントロポセン(人類新世)よりもクトゥルー新世の概念を主張しています。アントロポセンは、ハラウェイが唱える「人間と非人間の関係が切り離せない時代」よりもさらに受け身です。彼女は、傷ついた土地に住み共に死ぬという「問題継続」を学ぶことで「もっと住みやすい未来を築こう」とする思考が生まれるとしています。私たちを今日まで導いた創造力は、恐ろしくもあり魅力的でもあります。今、それを見つめ直す時がきました。ツィンメルマンが「the space in between」で唱える「間」は、慈しみと静けさを呼び、発展と環境のバランスを見つけ、これまで歩んできた道のりと希望に満ちた地平線をつなぎます。

このテキストの英語版は、ツィンメルマンによる出版物「Polipoli」(2022)の一部です。日本語訳はウェーバーバウアー睦子。

2023年7月